

日中トップテニスプレーヤーの国内育成システムの比較研究 —トリプルミッションモデルの視角から—

卓 文達 仲野 隆士

A Comparative Study between Japan and China's National Training Systems of
Top Tennis Players
—from the View of Triple mission model—

Wenda Zhuo Nakano Takashi

Abstract

In the 2011 French Open, Li Na, a 29-year-old woman from Wuhan, China, became the first person from Asia to win a Grand Slam singles title. On the other hand, Nishikori and three other Japanese male players joined in the 2012 US Open singles draw, while Chinese male player Wu Di became the first Chinese man to play singles in any Grand Slam tournament in the 45-year-old Open era in 2013 Australian Open.

If we also take a look at the ATP ranking, we will find out that, Japanese men's players are ranked much higher than Chinese men's players, while the average level of female players of Japan is also very high. However, from an overall point of view, as the popularity of women's tennis can hardly be compared to man tennis, the Japanese Tennis is more successful than that of China.

Why does such a big country as China not even have a single male tennis player in ATP Top 100? And, how did Japanese tennis become so successful? What is the difference between China's and Japan's national training systems of professional tennis players? My research will focus on these three issues.

一. 緒言（研究の背景）

テニスは現在オリンピック種目の一つを構成する世界的なスポーツに発展している。特にグランドスラムといわれる4大会は有名で、世界中のテニスプレーヤーの憧れとなっている。

世界の中での日本のプロテニスプレーヤーの活躍は、特に男子において中国を大きく上回っているのが現状である。その点に着目し、中国のトップテニスプレーヤーが世界で活躍するための問題や課題などを検討するに当たり、中国はヨーロッパに学ぶより同じアジアの日本から学ぶことが急務の課題であると考えた。

一方、テニスに関する先行研究に着目した場合、バイオメカニクスを中心とした自然科学的な研究が主流であり、社会科学的研究は少ない。また、いわゆるエリート選手に着目したが多く、テニスプレーヤーの国内育成やスポンサー、あるいは市場などに焦点を当てた研究は極めて少ない。この点に関して述べるならば、日中のトップテニスプレーヤーの育成など、本研究と直接関係がある研究は未だ成されてはいない。ここに、本研究のオリジナリティーと研究価値が存在していると考えられる。

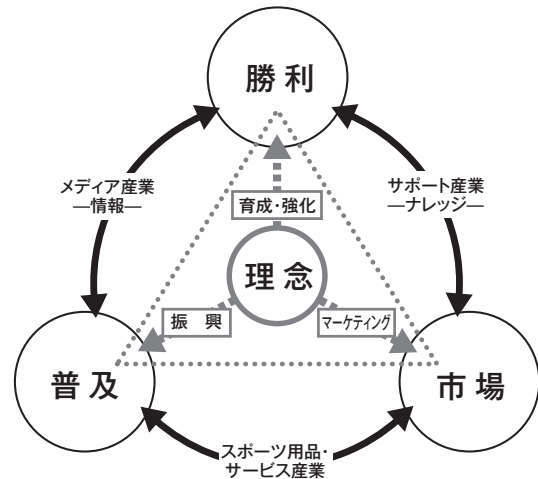
二. 研究の目的

本研究の目的は、以下のとおりである。

中国と日本におけるテニス育成システムについて、オープン化以来（1968年）両国それぞれの発展の流れと現状を明らかにすること。つまり、日本テニス界の成功の軌跡を考察し、また、中国の国内特有のスポーツ体制と其中でのテニス界の発展を考察し明らかにする。

そのための視角として、平田ら(2006)が提唱した、「勝利・普及・資金獲得」という「トップスポーツビジネスの果たす3つのミッ

ション」=「トリプルミッション」を採用し、日本のテニス界がこの三つの要数をどの様にお互い影響し合い、拡大しているのかを分析し、中国のテニスと比較する。



そして、両国のテニスの現状において、それぞれの点がどのようにトッププレーヤー勝利への育成に影響を与えるかを、トリプルミッションモデルを通じて比較する。最もテニスプレーヤー育成に大切なジュニアプレーヤーの育成、ピラミッドシステムの立て方（普及から勝利への道）、テニスコーチング、とスポンサー（勝利のための経済面支援）、を中心として比較する。

その中から、日本テニス界のピラミッドシステムをまとめ、さらに中国男子プレーヤーが強くない理由を明らかにし、中国テニスの現状を日本と比較しながら、中国テニス界に存在している問題を明らかにする。

以上を総括して、より成熟している日本テニスから、中国が何を学ばなければならないかを見出す。さらに、両国はこれからのように協力すれば良いかを提言する。

三. 研究方法

本研究は、日中はトップテニス国内育成システムの発展と現状を明らかにし、勝利、普及と市場、三つの点から比較するという

二つの点を目的とする。そこで、トッププレーヤーの育成とスポンサー、普及、そして有望なジュニアプレーヤーの育成と強化について、直接インタビューを行うことにした。

インタビュー調査については、対象本人の了解をえた上で、インタビュー内容をICレコーダーで録音した。インタビューは平均30分にわたり、各対象者に一回実施した。

＜日本におけるインタビュー＞

インタビュー対象は、日本テニス協会常務理事・福井烈氏（調査日：2013年11月1日）、JTAアンダー14男子監督・桜井隼人氏（調査日：2013年12月3日）、ジュニア育成コーチの大島伸洋氏（調査日：2013年11月2日）の3名である。

調査内容として質問した主なものは、次のとおりである。

- ・トッププレーヤーの育成について
- ・普及について
- ・有望なジュニアプレーヤーの育成と強化について
- ・日本テニスコーチについて

＜中国におけるインタビュー＞

インタビュー対象は、上海専業選手コーチ Yu Naizhen（調査日：2013年10月13日）、上海 Yangpu 区テニスコーチ Tian qing（調査日：2013年10月15日）の2名である。

調査内容として質問した主なものは、次のとおりである。

- ・トッププレーヤーの育成について
- ・普及について
- ・有望なジュニアプレーヤーの育成と強化について
- ・中国テニスコーチについて
- ・体制について

最終的には、トップテニスプレーヤーを育成するため、プレーヤーとコーチだけではなく、トリプルミッションモデルを用い

た立体的な考えから、どのように環境を作るべきであるかを提言する。

四. 先行研究のレビュー

中国テニスプレーヤーの国内育成、また、日中テニス、テニスプレーヤーの育成など、本比較研究と直接関係がある研究は未だに成されていない。ここに、本研究のオリジナリティーと研究価値が存在していると考えられる。

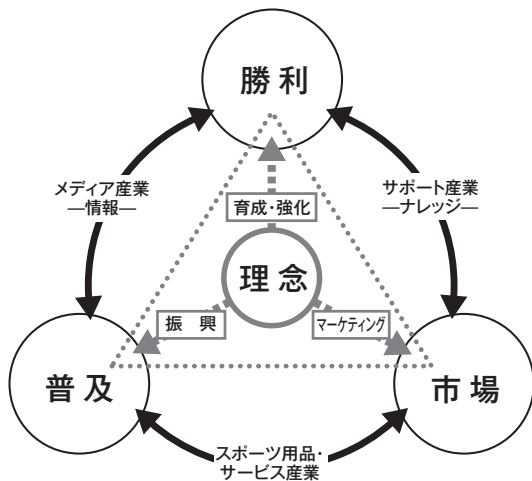
中国のテニスプレーヤーの国内育成システムにおける先行研究から、今まで体制の中でやってきた中国テニス界が、大きな変化を求めている実情を捉え、拳国体制を反省し、新たな将来に向かい、いくつかの方法を提言したものの、理論的な基盤と分析が不足であることが示唆される。

一方、日本の先行研究では、日本の国内育成システムではトップテニスプレーヤーを育てにくいことが証明されていた。エリートに関わる研究は多いが、普及と市場の面を分析していないことが分かった。また日本国内の分析が中心で、他国との比較が成されていない。

筆者は今まで日本のトップテニス界を観察した結果として、日本のトッププレーヤーと中国のトッププレーヤーとを比べれば、日本の方が成功していると判断している。中国テニスの将来を、ビジネス化を目標とし、同じアジアである日本との比較が必要であると感じる。さらに、勝利と普及と市場を結び付けて比較し、もっと合理的な提言を示すことが必要であると考えた。

五. トリプルミッションモデルの検討

平田(2006)は、プロスポーツ界において競技団体やプロクラブが永続的な発展をしていくためには、競技力向上を図っての「勝利」の増加、収益最大化のための「市場」の拡大、競技の裾野を広げる「普及」活動とい



う3点の要素がそれぞれに拡大しつつ、互いに好影響を与え合うという循環が必要不可欠であると指摘している。そして、これを「トリプルミッション」と名付けている。

今まで、早稲田トップスポーツマネジメントコースでは、ゴルフトーナメントモデル、Jリーグクラブを対象としたトリプルミッションモデル、トリプルミッションから分析するF1におけるチーム経営と成功チームの抽出に関する研究、トリプルミッションモデルから見た日本陸上競技界発展構造の解明など、トリプルミッションに関する研究が多く行われており、トリプルミッションモデルは、団体スポーツのみならず、個人種目にも使えることも示している。

佐藤(2010)は、このトリプルミッションモデルを用いて日本テニス界の新たな展望を「勝利」、「市場」、「普及」の3点に分け、分析を試み、次のような結論を導いている。まず、勝利について、日本テニス界における「勝利」はITFトーナメントでの日本人の優勝回数を25回～30回に上げること。世界に挑戦するテニスプレイヤーの層を厚くすることが重要であること。そして、テニスサーキットの東アジア圏の形成について、日本人の優勝をトーナメント環境からサポートする意味での「東アジアテニスサーキット」を東アジア諸国と連携して形成すること。さらに、「大陸を横切りまた帰るとい

う交通費の大量支出なく順番にトーナメントを回っていくことのできる経済的にも選手の体力的にもECOサーキットであることが望ましい」と述べた。普及についてはテニスコンテンツの充実、多様化と観るテニスを普及することの重要性を指摘した。市場については、テニストーナメントの興行化、またトーナメントを通して地域経済を活性化することを重視すべきであるとまとめた。

一方、佐藤(2010)は「東アジアテニスサーキット」について、アジアはヨーロッパヨーロッパの次にトーナメント開催数が多い地域であったが、北アメリカと異なりトーナメント開催週が少ない。また、同じアジアでも中東、東南アジア、東アジア等トーナメントが点在している。こうした状況から、日本は確かに世界で5番目にトーナメント開催数が多い国であるが、ヨーロッパやアメリカと異なり周辺国の開催数が少ないこと、あるいは自国で選手がポイントを十分獲得できる開催数までは至らないことが問題点として挙げられると指摘し、そのため、東アジアサーキットが連携してトーナメントを開催することで、ヨーロッパ、北米地域に対抗する第3勢力を構築する構想を提唱した。

佐藤(2010)は、日本の状況についてトリプルミッションモデルから提唱しているが、モデルを用いた詳細な分析と、外国との比較は実施していない。

本研究において、トリプルミッションモデルを通じて、両国のトップテニスプレイヤーの国内育成システムを比較する。

勝利において、平田ら(2006)はスポーツ経営には勝利が必要だと述べた。テニスの場合は、サッカーのようなリーグ戦で勝つのではなく、プレイヤーは個人として世界的な大会で勝つことを目指している。グランドスラムに出場ができなければ、テレビ放

映にならない。

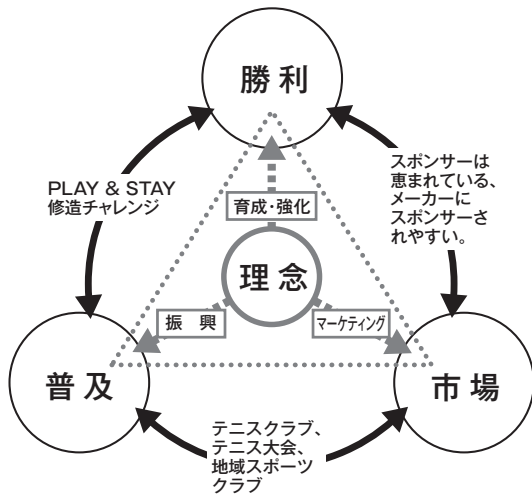
本研究は、両国で現在活躍しているトップテニスプレーヤーを紹介し、現在グローバル化のテニス界において、テニスプレーヤーの活躍、育ち方を分析する。その中で、中国の挙国体制がテニス界にどのように影響しているのかを、トリプルミッションの観点から分析する。

普及においては、両国のテニス協会、また、テニスプレーヤー育成に大切なジュニアプレーヤーの育成、ピラミッドシステムの立て方（普及から勝利への道）、テニスコーチングを分析する。

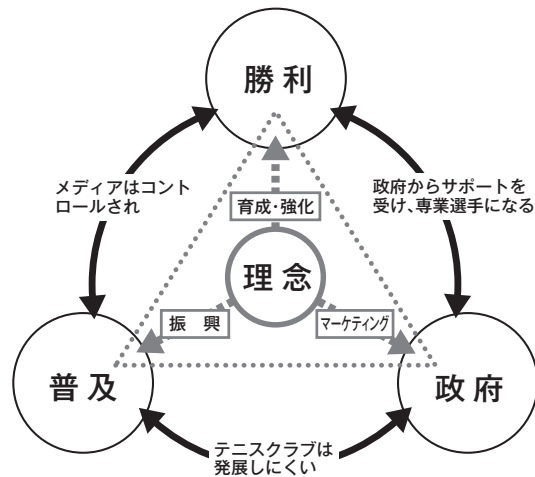
市場においては、トッププレーヤーを中心として研究するため、本研究はプロになるためのスポンサー（勝利のための経済面支援）を分析する。また、プロに転向するプレーヤーへの資金支援、テニスクラブとテニス用品の物づくりを比較する。

六. 考察

日中比較



日本のトップテニスプレーヤーの国内育成システムにおいては図の通り、世界に通用するトップテニスプレーヤーが育つ法があり、サポート体制も確立され、海外、また国際大会に出場するという大構図がみられる。



一方、中国のトップテニスプレーヤーの国内育成システムは、図の通り、政府主導によって、专业選手が育成、強化されていた。単飛政策ができてからの中国は、二つの道に分かれる。

A：专业選手になり、政府にサポートされ、体制中育成、強化。一方、プレーヤーのボーナス、またスポンサーは政府によりコントロールされる。その結果は市場が成長されず弱化となる。

B：単飛（プレーヤー経済独立化）し、勝利すれば、スポンサーが付く、そしてプロ化に育成、強化。この場合、テニス市場は拡大する可能性が高いと考えられる。

中国のテニス市場は成熟していないため、Bを選択することはトップになってからしか考えられないのが現状なのである。

勝利面の比較

トッププレーヤーの活躍について、中国は女子ダブルスが活躍し、また李娜はアジア人として、グランドスラム初優勝となったが、男子は極めて弱い。一方、日本では男子ランキング50位以内に入り、女子も最高4位に入ったことから、日本のトップテニスプレーヤーの活躍は相対的に中国より成功しているとみることができる。

また、錦織圭が2012年ジャパンオープンに日本人として初めてツアー2勝をしたプレーヤーとなったことと比べ、中国は、上海マスターズと北京オープンにおいて、何れも優秀したことがない。

トッププレーヤーの育成については、中国における今までのトッププレーヤーは専業選手であり、政府からサポートされながら、活躍していた。単飛政策はできたが、わずかの中国トッププレーヤーにしか通応されなかった。一方、日本のトッププレーヤーはテニスクラブ、テニススクールに通って、プロに転向することになっている。日本のテニスプレーヤーは海外に活動拠点を移しツアーを転戦し、グローバル化している。

普及面の比較

中国のテニスの普及は、協会の努力が足りない上に、市場は成熟していないため、テニスクラブとスクールは発展しにくい。さらに、体制の影響でピラミッドシステムを確立することが困難である。国内の大会は少なく、専業選手は多くいる一方、青少年の基本的なトレーニングと高いレベルのコーチが育つシステムが不足している。さらに、中国のメディアは、政府にコントロールされ、体制を守り続けている。

中国ジュニアプレーヤーの現状については、ジュニアプレーヤーの大会経験の不足は、一番の問題である。ランキングが足りないため、低レベルの大会に参加することしかできず、WTA ツアー、また、ATPに参加する資格はない。この悪循環のように、プレーヤーは、世界でトップクラスのプレーヤーと会う機会が不足している限り、迅速に成長することはできない。

コーチについて、CTAは、コーチの資格を持つことに対する要求がない。そのせいで、一般人のテニス市場が混乱している。専業選手を引退してから専業選手に指導する

コーチになるケースは多く、そうであれば、国際的な経験が少なく、専業選手たちを連れてツアーを回る能力が低いと考えられる。

一方、日本は多くのテニスクラブ、様々な各年齢段階のテニス大会、地域スポーツクラブを持つ、成熟なピラミッドシステムが確立されている。また、青少年の基本的なトレーニングと高いレベルのコーチが育つシステムを確立している。普及のためのテニス協会、またテニスに関係する組織の多くの努力がある。引退したプレーヤーはテレビでテニス普及のために大きな影響を与えている。

日本では、いいテニス環境が作られている。修造チャレンジ、NTC、協会の連携が、テニスプレーヤーの育成に対し有効である。ナショナルコーチは各地域に行き、各大会で優秀する11歳が12歳からのジュニアに注目、選抜し、合宿させる。また男子において、修造チャレンジが長く続き、そこで優れたジュニアを海外に行かせる。

テニスコーチングについて、テニススクールのコーチの評価は、協会の資格が必要である。また、トッププレーヤーのコーチは、日本人コーチが増えてきた。ツアーに回るため、日本人コーチのコミュニケーション能力が上がってきて、外国のコーチたちと互いに協力しながら、プレーヤーの練習相手を探すことが大事だと思われる。

市場面（資金）の比較

中国の体制内では、民間のテニスクラブ、スクールを作ることが困難である。体制に入らないと、全ての大会に参加する資金は自分で負担する。一方体制内の専業選手はワイルドカードをもらい、資金面も支えられる。中国のテニスプロ化の道がまだ成熟していないため、体制以外のプレーヤーが、大会に参加すると、多くの投資がなければ

ならない。しかし、体制の中のプレーヤーが様々な面から支えられる一方、体制からも制約されているのである。

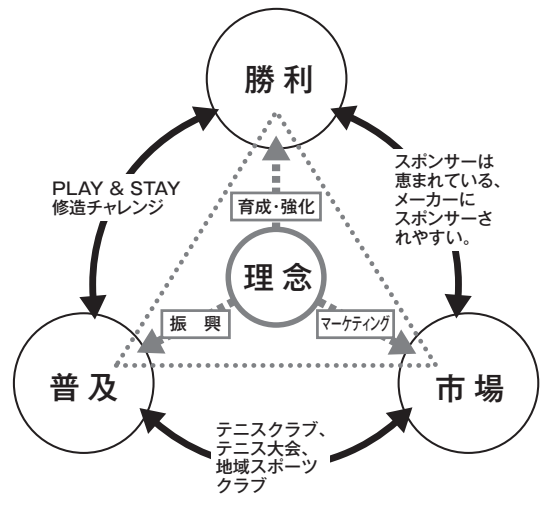
資金を求める場合は、二つ方法がある。専業選手になるか、単飛か。中国政府の体制が市場の地位を取り込んでいることによって、これから市場の発展も困難である。体制は専業選手を支えているが、トップになると、体制は専業選手のスポンサーとボーナスを多く取ることによって、プレーヤーのプロ化への妨げになっている。

単飛政策があるが、まだ男子選手とジュニア選手に通応されたことはない。なぜならば、市場が成熟しないため、選手は単飛できないのである。

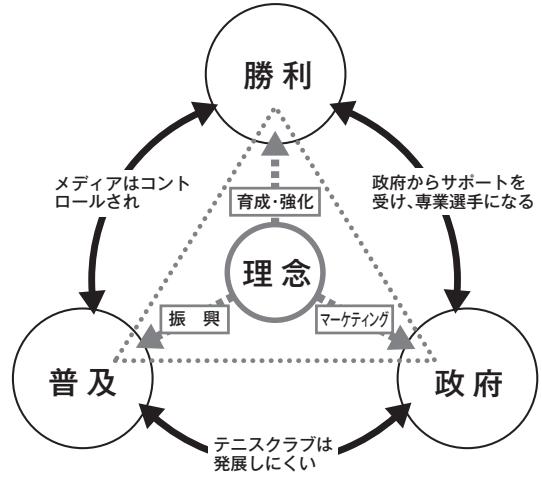
一方、日本は恵まれていると思われる。日本ではテニスメカ、ダンロップとヨネックスはブランドがよく確立されている。また、盛田正明テニスファンドなど、要望なジュニアプレーヤーにサポートし、世界トッププレーヤーを育てようとしている。

日本は基本的にスポンサーができれば、プロになれる。日本は中国よりスポンサーを探し安いようで、テニスはスポンサーが付きやすいスポーツとなっている。そして、テニスに関するメカから、多くサポートされている。しかし、中国のように政府からサポートされることは全くない。トッププレーヤーである錦織は、森田ファンドから選抜され、実力があるため、IMGと契約した。しかし、一般のプレーヤーは、お金がないため、ツアーを回れない。日本の場合は、テニスプレーヤーがトップにならなくても、テニス人口が多いため、生活面での心配はさほど無い。つまり、プロになるリスクが中国ほど高くない。

六. まとめ 日本の現状



中国の現状



日本のトップテニスプレーヤーの国内育成システムは、図の通り世界に通用する育成が確立され、市場も機能しプレーヤーはサポートされながら、海外遠征、また国際大会に出場している。一方、中国のトップテニスプレーヤーの国内育成システムは、図の通り現在でも市場は機能しておらず政府によるコントロールが強く「専業選手」が育成、強化されるという構図がみられ、世界に通用する育成システムとは成り得ていないことがわかった。一連の政府の関与から独立するプレーヤーも現れていることもあり、中国の育成システムは過渡期にあると

考えられる。

日本では、プレーヤーがジュニアからテニススクールに通い、大会に出場し、そして日本国内で訓練するか、外国で訓練するかなど、いろいろな道と選択枝が存在する。協会、また企業からの多くのサポート体制もある。つまり、トリプルミッションに沿って発展しているということが分かった。

一方、中国のテニス人口は増加傾向にあり、過去に比べ、より多くのプロプレーヤーが出てきているが、中国男子プレーヤーの世界の舞台での活躍はまだみられない。現在プレーヤーとして活躍しているのは、専業選手である。普及と市場の面では、まだまだ弱い部分が露呈された。中国のテニス界が、これからどのように体制の壁から離れ、自ら勝利、普及と市場を拡大し、プロ化、ビジネス化されるのかは、重要な課題となる。中国のトップテニスプレーヤーの育成は、その頂点が日本のようにピラミッド構造から形成される必要があり、プロ化の管理、市場が成熟されることが必要不可欠である。これからの中国テニス界は、プロスポーツ発展の法則、またトリプルミッションに沿って運営されていくことが大事であると考えられる。

中国に対する提言として、まずテニス協会は体制から独立し、コーチングの質を上げ、成熟なピラミッドシステムを確立することと、青少年の基本的なトレーニングと高いレベルのコーチが育つシステムを確立することを挙げるができます。ビジネス化のテニスクラブを発展されるために、有利な政策を作らなければならない。さらに柔軟な組織体制作りとメディアへの対応が必要とされる。

参考文献

- 李志堅「体育運動の持続的発展の規律への認識を深める」、『体育文史』第4号, p. 6, 2001年
- 呂洋「The Research on the Status Quo & Developmental Strategy of Chinese Broad Masses Tennis」, 長春师范学院本科毕业论文 2009年
- 陳如專「論中国网球运动的发展」Journal of Chifeng University(Natural Science Edition) Vol.26 No.4 Apr.2010
- LiuBaohua 「The Status Quo and Trend of Development of Chinese Competitive Tennis」 Journal of Hebei Institute of Physical Education Vol.122 No.15 Sep 2002年
- 佐藤直子「日本人テニスプレーヤー(女子)のメジャートーナメント出場機会促進に関する研究」早稲田大学 2010年度 リサーチペーパー
- 坂井利彰「男子プロテニス選手育成に関する成功要因に関する研究—世界ランキング100位以内日本人選手の大学における育成」早稲田大学 2006年度 リサーチペーパー
- 宮地光太郎「日本テニスプレーヤーの現状と課題—男子大学生テニスプレーヤーを対象として」関西国際大学研究紀要 第12号, 2011年, 211-220
- CLARISSA SEBAG-MONTEFIORE
「Fighting Communism, One Athlete at a Time」NYT July 05, 2013
<http://cn.nytimes.com/opinion/20130705/c05sebag/en-us/>
- Douglas Robson「Kei Nishikori leads rise in tennis in Japan」USA TODAY Sports 4:12 p.m. EDT June 2, 2013
<http://www.usatoday.com/story/sports/tennis/2013/06/02/kei-nishikori-french-open-tennis-in-japan/2382457/>

Joe 「ATP 掌門：将延续中国战略 拥有李娜
不仅是女网之幸」 1.2012 [http://cn.atp-
worldtour.com/News/Tennis/2012/02/
Features/Sina-Brad-Drewett-
interview.aspx](http://cn.atp-worldtour.com/News/Tennis/2012/02/Features/Sina-Brad-Drewett-interview.aspx)

CHRISTOPHER CLAREY 「Chinese
Player Breaks New Ground at Aus-
tralian Open」 NYT January 15, 2013
[http://cn.nytimes.com/china/20130115/
c15tennis/en-us/](http://cn.nytimes.com/china/20130115/c15tennis/en-us/)

Robert Davis 「THE RISE OF JAPAN-
ESE TENNIS」 DEUCE MAGAZINE
2013 Australian Open Special
[http://www.atpworldtour.com/News/D
EUCE-Tennis/Deuce-2013/Japanese-
Tennis.aspx](http://www.atpworldtour.com/News/DEUCE-Tennis/Deuce-2013/Japanese-Tennis.aspx)

胡金 「翹膀未硬的网球职业化」 纽约时报中
文网撰稿 2012 年 08 月 07 日
[http://cn.nytimes.com/sports/20120807
/c07tennis/](http://cn.nytimes.com/sports/20120807/c07tennis/)

植田実 「スペインでの学び研究報告」
[http://www.bss.ac.jp/bss-project/acade-
mic/img/ueda.pdf](http://www.bss.ac.jp/bss-project/academic/img/ueda.pdf) スポーツ指導者海外
研修事業報告書 2004

平田竹男 中村好男 「トップスポーツビジ
ネスの最前線」 講談社 P13-15 2006 年
日本テニス協会 「日本テニスの歴史」 2010
[http://www.jta-tennis.or.jp/JTA/his-
tory/history_of_japantennis.html](http://www.jta-tennis.or.jp/JTA/history/history_of_japantennis.html)

